

20世紀初頭欧米女性解放思想の日本・中国への伝達の過程 ——August Bebel : *Die Frau und der Sozialismus* の場合——

伊藤 セツ・王 宓

はしがき

伊藤は1990年代に入ってから、本学女性文庫所蔵のゲリッツェン女性史コレクション(掛川 1992 参照)を利用して、ドイツのアウグスト・ベーベル(Bebel, August 1840-1913 以下ベーベルと記す)の『女性と社会主義』(*Die Frau und der Sozialismus*以下 "Die Frau" と記す)に関する研究を行ってきた(伊藤 1992, 1996, 1997, 1998a)。その過程で、ドイツでの、ベーベルの選集全10巻14分冊(*Ausgewählte Reden und Schriften*, 以下『選集』と記す)の完結(Bebel 1970-1997)やベーベル夫妻の書簡集(Hermann 1997)の出版があり、1998年には選集や書簡集の編者とベルリンで会う機会もあった。伊藤はこれら新出版物の紹介(伊藤 1998b, 1998c, 1998d)も行い、これまで十分には知られていなかったベーベルの女性解放に関する多面的執筆活動の情報を把握した。

他方、欧米女性解放思想やフェミニズムの中国への伝達・受容の過程に関心を持っていた王は、最初、中国における女性学の形成を追っていた(王 1993, 1994)。続いて1995年の第4回世界女性会議が北京で開催されたことから、同会議で採択された「行動綱領」中のキーワードが、オリジナル言語を英語としながら、国連公用語の一つでもある中国語にどのように翻訳されているかを、同じ漢字文化圏である日本語訳との関連で比較検討した(王 1997a)。こうした研究の過程で、中国にとって欧米女性解放思想を取り込んだ初期に当たる1920~30年代へ遡る必要を

感じるに至った。しかし、当時において女性解放思想は、他の欧米思想の中国への導入や受容と同じく、その媒介として日本及び日本語の存在を無視することができない。そこで、日本語から中国語への翻訳が多く、日本への留学経験もある李達に注目して、翻訳に限らず、彼の女性解放論関係の著書に見る山川菊栄の影響を検討した(王 1997b)。山川菊栄は、英・米語(ゲリッツェン女性史コレクションの言語区分に従って、英国で出版されたものを英語、米国で出版された英語を米語と呼ぶ)を通じて、欧米女性解放思想を日本に紹介した第一人者であり、ベーベルの "Die Frau" の米語からの最初の日本語完訳者としても知られ、ベーベルの影響も受けている。

ところで、1998年度から、本学大学院生活機構研究科修士課程に比較文化研究専攻が開設された。伊藤は同専攻の院生教育に当たるため、これまでの研究蓄積の上に、「比較文化」関連テーマとして、ゲリッツェン女性史コレクションを利用しながら、欧米の女性解放思想(フェミニズムや女性学を含む)の日本への影響を研究しようとしていた。しかも、欧米と日本のみならず、王が現在検討している欧米と日本と中国、つまり漢字文化圏への欧米の文献と思想の伝搬が、どのような相互関係にあったかを、世界20言語(国)以上に翻訳されているベーベルの "Die Frau" を例に研究することに関心をもってきた。

本稿は、こうした伊藤と王の問題関心の共通の接点に沿って、この間共同研究してきたこと

の中間報告である。言語は、独語、英(米)語、日本語、中国語にまたがるので両者の共同研究が必要とされた。以下、ベーベルの独語版 "Die Frau" に関する部分、及び日本語への翻訳経路は独語・英(米)語も含めて伊藤が、中国語版の関係経路は王が担当して叙述する。なお、1999年は、"Die Frau" の初版出版120周年である。

1、ベーベルの "Die Frau" の変遷

ベーベル『選集』中にはベーベルが発表した

すべての文献名が番号を付して揚げられている。それに依拠して "Die Frau" の改訂と主な出版状況を表1に、独語以外の言語への翻訳状況を表2に示す。ベーベルは、1879年の初版の後、1883年、1884年、1891年、1895年、1903年、1910年と6度の改訂を行っている(詳細は、伊藤1997)が、同じ版の「刷り」も、新たな「改訂」もすべて、Auflage(「版」)として通し番号で表している。以下の表で、改訂時をそれぞれ表中に点線を入れて注意を促した。

表1 ベーベル"Die Frau"のベーベル生存中の発行・改訂情況年表

(版、出版年、日本語表記、必要に応じて原語、[] 内の数字は『選集』の文献番号)

1	1879	『女性と社会主義』ホッチングン-チュリヒ(ライプツィヒ)人民書店出版, 180頁。 <偽装タイトル>『エンゲル 統計学 第5冊』(<i>Die Frau und der Sozialismus, Hottingen-Zürich</i> [Leipzig], Verlag der Volksbuchhandlung, 180 S. [Tarntitel:] Engel, Statistik, Funftes Heft.) [460] (一橋大学社会科学古典資料センター所蔵)
2	1883	『過去・現在・将来の女性』第2増補改訂版, ホッチングン-チュリヒ スイス人民書店出版, 6. 220頁。 <表題変種>チュリヒ:マガジン社(J. シャーベリッツ) <変装タイトル>工場監督官報告 (<i>Die Frau in der Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft.</i>) [2.überarbeitete und erweiterte Auflage] Hottingen-Türich. Schweizerische Volksbuchhandlung. VI. 220 S. [Titelblattvariante:] Zürich: Verlags-Magazin (J. Schabelitz). [Tarntitel:] Bericht der Fabrik-Inspektoren. [620] (ゲリッツェン女性史コレクション [D183] 収録)
3	1884	『過去・現在・将来の女性』第3版 ホッチングン-チュリヒ スイス人民書店出版, 6, 220頁。[690]
9	1891	『女性と社会主義-過去・現在・将来の女性』第9全面改訂版, シュツットガルト J.H.W.ディーツ社, 1891. 382 頁。(<i>Die Frau und der Sozialismus. Die Frau in der Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft.</i> Neunte gantzlich umgearbeitete Auflage. Stuttgart : J. H. W. Dietz 1891. 382 S.) [1301] (都立立川短大図書館金子文庫所蔵)
11	1892	『女性と社会主義-過去・現在・将来の女性』第11改訂版, 国際文庫 第9巻, シュツットガルト, J. H. W. ディーツ社, 1892. 20 386 頁。(<i>Elfte neubearbeitete Auflage. Internationale Bibliothek. [Bd.]. 9. Stuttgart : J. H. W. Dietz) 1892. XX, 386 S. [1376]</i>
25	1895	『女性と社会主義-過去・現在・将来の女性』全校閲・改訂・新資料付与の 第25記念版, 分冊本, 第1~10, シュツットガルト, J. H. W. ディーツ社, 1895, 24, 472 頁。(<i>Vollständig durchgesehen, verbessert und mit neuen Materialien versehen, Jubiläums-Ausgabe 25. Auflage. Heft Ausgabe. Heft 1 [1] 10. Stuttgart :</i>

		J. H. W. Dietz, 1895. XXIV, 472 S.) [1677]
1895		『女性と社会主義』全校閲・改訂・新資料付与の第25記念版, 国際文庫, 第9巻, シュツットガルト, J. H. W. ディーツ社, 1895, 24, 472 頁. (<i>Die Frau und der Sozialismus</i> . Vollständig durchgesehen, verbessert und mit neuen Materialien versehen, Jubiläums-Ausgabe 25. Auflage. Internationale Bibliothek. [Bd.] 9. Stuttgart: J. H. W. Dietz 1895. XXIV, 472 S. [1678])
31	1900	『女性と社会主義』第31版シュツットガルト, J. H. W. ディーツ後継社, 1900. 24, 472 頁. (J. H. W. Dietz Nachf) [2147] (ゲリッツェン女性史コレクション [D184])
34	1903	『女性と社会主義』第34版, シュツットガルト, J. H. W. ディーツ後継社, 1903. 24, 476 頁. [2406] (マイアミ大学図書館U. S. A. 所蔵: 昭和女子大学図書館マイクロリール [M36-08])
50	1910	『女性と社会主義』第50版, 増補新改訂, 記念版, シュツットガルト, J. H. W. ディーツ後継社, 1910. 32, 519 頁. (<i>Die Frau und der Sozialismus</i> . Verbessert vermehrt und neubearbeitet. Jubiläums-Ausgabe. Stuttgart J. H. W. Dietz Nachf. XXXII, 519 S.) [3077] (ゲリッツェン女性史コレクション [D185])
51	1910	『女性と社会主義』第51版, シュツットガルト, J. H. W. ディーツ後継社, 1910. 32, 519 頁. [3078]
52	1911	『女性と社会主義』第52版, 第50記念版以後変更なし, シュツットガルト, J. H. W. ディーツ後継社, 1911. 32, 519 頁. (<i>Die Frau und der Sozialismus</i> . 131. bis 135 Tausend. [52. Auflage.] Nach der Jubiläumsausgabe unverändert. Stuttgart J. H. W. Dietz Nachf. XXXII, 519 S.) [3206]
53	1913	『女性と社会主義』第53版, 第50記念版以後変更なし, シュツットガルト, J. H. W. ディーツ後継社, 1913. 32, 519 頁. (<i>Die Frau und der Sozialismus</i> . 136. bis 140. Tausend [52. Auflage.] Nach der Jubiläumsausgabe unverändert. Stuttgart Verlag J. H. W. Dietz Nachf. G. m. b. H. 1913. XXXII, 519 S.) [3368] (この年ベール没)

以上のように、"Die Frau" は、ベールの生存中53版迄発行されたが、その各国語への翻訳状況はどうであろうか。『選集』の編者達は欧米語に限ってこれを把握し、『選集』の文献リストと注記の中に詳細な情報を記入している。それを参考に独語以外の翻訳を一覧表にしたものが表2である。

翻訳はベール生存中のものに限っているが、この時点ですでに21言語(国)に翻訳されたことになっている。日本語訳は1904年と1911年に翻訳が有るように記しているが、以下詳細に見るようにこれらは日本側では確認されない。本格的日本語訳、中国語訳が出るのは、1920年代であるので、これらは生存中の翻訳に限定した『選集』には把

握されていない。1998年9月に伊藤がベルリンで会った『選集』の編者達は、正確な日中訳の情報を欲していた。

英(米)語版は、ベール生存中に、ロンドン1885年、ニューヨーク1886年、ロンドン1893年、ニューヨーク1904年、ニューヨーク1910年と出されていることを『選集』の編者達は把握している。これらが日本及び中国の翻訳と関連してくるので以下表3に示す。しかし、これら以外にも1897年にサンフランシスコで訳者不明の米訳が出されており(ゲリッツェン女性史コレクション [A190])、日本で"Die Frau"の翻訳を米語から1919年に試みた村上正雄は、英語は5種あり、シカゴで米訳が出されていると記している(掲表4中の付参照)。

表2 『選集』が把握している『女性と社会主義』のペーペー生中の外国語訳一覧(『選集』の中の文献番号略)

外国語	英	日	デンマーク	スウェーデン	フランス	ルーマニア	オランダ	イタリア	ギリシヤ	ブルガリア	ロシア	チェコ	ハンガリー	ポーランド	フィンランド	スペイン	アルメニア	グルジア	レツテ	ノルウェー	セルビア	クロアチア
翻訳年																						
1884			コペンハーゲン																			
1885	ロンドン		コペンハーゲン	ストックホルム																		
1886	ニューヨーク																					
1887																						
1888																						
1889																						
1890					パリ	* ?	アムステルダム															
1891						* ?		ミラノ	アテネ													
1892						* ?																
1893	ロンドン					ブカレスト?				ブカレスト?												
1894											ロンドン											
1895													ブダペスト									
1896							アムステルダム						ブダペスト									
1897														ロンドン								
1898																						
1899																						
1900																						
1901																						
1902																						
1903				ストックホルム																		
1904	ニューヨーク	* ?																				
1905								ミラノ パレルモ			ザンフ モスクワ オデッサ ペテルスブルグ											
1906																バルセロナ	?					
1907																						
1908																						
1909							ゲント?															
1910	ニューヨーク					* ?	アムステルダム															
1911					パリ?	* ?																
1912				ストックホルム?																		
1913				ストックホルム?																		

『選集』の中の文献リスト及び注記によって作成

注1) 表中の地名は出版地である。

注2) 『選集』のリストや注記中で曖昧なものは?を、部分訳は*を、付した

表3 『選集』が把握しているベーベル "Die Frau" の英米語翻訳
(翻訳年、訳者名、翻訳書名、出版社、出版地、ページ数、『選集』文献番号等)

1885	H. B. Adams Walther : Translated from the German <i>Women in the past, present, and future.</i> International Library of Social Science. Bd. 1, London. The Modern Press 1885. 264 p. [758] (ゲリッツェン女性史コレクション [B189])
1886	H. B. Adams Walther : <i>Women in the past, present, and future.</i> Labour Library, Bd. 2. New York 1886. 268p. [834] (ゲリッツェン女性史コレクション [A188])
1893	H. B. Adams Walther : Translated from the German <i>Women in the past, present and future.</i> London : Willian Leeves 1893, 264p. [758] の再版 [1511] (1897 訳者不明 : <i>Women in the past, present and future.</i> San Francisco, G. B. Berham, 1897, 171p.) (ゲリッツェン女性史コレクション [A190])
1904	Daniel de Leon. : <i>Woman under socialism.</i> Tr. from the original german of the 33-d ed. New York 371p. [2503] (ゲリッツェン女性史コレクション [A191])
1910	Meta L. Stern(Hebe) : Authorized Translation, <i>Woman and Socialism.</i> Jubilee 50th Edition. New York 1910. 512 p. [3081] (ゲリッツェン女性史コレクション [A187])

2、日本語への翻訳

(1) 翻訳のプロセス及び原語と英米語との関係

日本語への翻訳は、すでに犬丸（1980）によって紹介されているが、必ずしも十分とは言えない。今回さらにその不十分だった点を補って

年表風にまとめると表4の通りである。表中、1998年末現在昭和女子大学女性文庫などに収録されているものを、その旨番号で指摘した。女性文庫における "Die Frau" の日本語各版収集は、本学図書館の努力で年々充実してきている。

表4 ベーベル "Die Frau" の日本への紹介及び日本語訳
(紹介・翻訳年、翻訳者名、翻訳書名、出版社、出版地、その他)

1903. 11. 29	『平民新聞』に、社会問題研究材料として Bebel, <i>Woman in the past, present & future</i> という書名が載る
? 1904. 3. 6	『平民新聞』の「平民文庫出版広告」に堺利彦・幸徳秋水訳『婦人問題の解決』という広告が載せられ、従来日本初の抄訳と考えられその書名が流布される。犬丸義一（1980）の調査で未完であることが明らかになる。
1904	『選集』[2504]に『女性と社会主義』1904部分訳とある。Hanako Watanabe（1984, p. 99）のドイツ語論文から情報を得たと、編者 A. Beskeは伊藤への私信で説明した。
1905. 5. 7/6. 4	社会主義講演会 堺利彦「ベーベルの婦人論」を2回にわたって講ず（『直言』1905. 5. 14/6. 4）
1905. 6. 25	『直言』に、 <i>Woman was a slave before the slave existed.</i> (Bebel) と出ている。

- ? 1911 『選集』 [3212] に『女性と社会主義』とある。根拠は [2504] に同じ。(Watanabe 1984, p. 100)
1919. 8. 23 村上正雄訳『社会主義と婦人 (過去)』三田書房 東京 152頁。ベーベル原著各版の序文なし、「過去」
(1920. 5. 20再) の部分のみ、英訳本からの重訳、山川菊栄序文 (1919. 7. 24) つき。訳者序 (1919. 5. 1)、訳書について (1919. 7) で英米語訳は5種あり、シカゴのCharles H. Kerr & Companyから出た*Women under Socialism*を注文したが入らないので、丸善から、*Women ; in the past, present and future*, Bellamy Library (London) を入手して訳した(「訳書に就いて」より) こと、あとがきで「現在の巻」の続巻訳出を予告している。Bellamy LibraryやCharles H. Kerr & Companyは『選集』でも押さえられていない。(未見)。
(昭和女子大学図書館1920. 5. 20再版所蔵 [女41-325])
1922. 10. 5 牧山正彦訳『婦人と社会主義 第一編』弘文堂 京都 192頁。ベーベル原著の34版、50版序文を冒頭におき、
(1922. 10. 20再) 25版への序文を末尾に付すと記す。訳者序 (1922. 9) によれば、独語最終改訳版 (Verlag von F. H. W. Dietz, Stuttgart 1920) からの日本語訳、さらに33版からのDaniel de Leonの米語訳を参照したとのこと、後に岩波文庫に入る。
(昭和女子大学図書館1922. 10. 20再版所蔵 [女41-380-1])
1923. 2. 1 牧山正彦訳『婦人と社会主義2 第二編 (上)』弘文堂 京都 440頁。
(昭和女子大学図書館1923. 2版コピー製本所蔵 [女41-380-2])
1923. 3. 13 山川菊栄訳『婦人論-婦人の過去現在未来』アルス 東京 752頁。ベーベル原著の各版の序文なし、訳者序 (1922. 8) にMeta L. Stern (Hebe) の米語訳 (1910) からの重訳とある。伏字あり。
(昭和女子大学図書館には2冊収録 [300-320-15] [女41-3])
1923. 5. 10 牧山正彦訳『婦人と社会主義 3第二編 (下)』弘文堂 京都 647頁。
(昭和女子大学図書館1923. 5版コピー製本所蔵 [女41-380-3])
1923. 11. 1 牧山正彦訳『婦人と社会主義 4第三編』弘文堂 京都 853頁。
(昭和女子大学図書館コピー製本所蔵 [367・1-Beb-4-女41])
1924. 5. 1 牧山正彦訳『婦人と社会主義 5第四編 (続)』弘文堂 京都1056頁 伏せ字あり(「おことはり」で、25版への序文は記さずとある。1924. 2)
(昭和女子大学図書館1924. 5版コピー製本所蔵 [367・1-Beb-5女])
1925. 10. 25 山川菊栄訳『婦人の過去現在未来』世界婦人文献第7巻、世界文献刊行会 東京、705頁。訳者序なし。非売品、扉にデューラーの「聖母子」の絵あり。伏せ字あり。すべての漢字にひらかなをふっている。
(昭和女子大学図書館所蔵 [女03-7-7])
- 中国語訳 1927刊行 (後述)
1928. 1. 25 加藤一夫訳『婦人論』世界大思想全集33 春秋社 東京 540頁。ベーベル原著の各版の序文なし。訳者によるベーベル小伝、解説あり。独語50版からの牧山訳を英訳と対照して手を加える。伏字あり。牧山の「代訳」とのこと (後出草間1928 p. 6)。非売品。扉にベーベルの肖像画あり。
(昭和女子大学図書館所蔵 [女41-1])
1928. 7. 20 ? 山川菊栄訳 上下2巻普及版 (犬丸 1980)。(未見)。
1928. 8. 7 山川菊栄訳『婦人論』社会思想全集第11巻に収録 平凡社 東京 645頁。ベーベル原著の各版の序文なし、伏せ字あり、扉にベーベルの肖像画あり。
(昭和女子大学図書館所蔵 [女41-2-C])
1928. 12. 25 草間平作訳 (= 牧山正彦、改訳)『婦人論』上 岩波書店 (文庫) 東京 348頁。ベーベル原著の各版の序

	文なし。訳者序あり (1928. 10)。扉にベーベルの写真あり。 (昭和女子大学図書館1937. 7. 20 の8刷り所蔵 [女8041])
1929. 2. 3	山川菊栄訳『婦人論』改造社(文庫)に入る。東京591頁。訳者はしがきあり(1928. 4)。伏せ字あり。 1937. 6. 25で第55版(犬丸1980)。(昭和女子大学図書館所蔵 [女8034])
1929. 3. 25	草間平作訳(=牧山正彦、改訳)『婦人論』下 岩波文庫 東京 572頁。伏字あり。 (昭和女子大学図書館1937. 11. 5の5刷り所蔵 [女8402])
	中国語訳 1949刊行(後述)
1952. 8	草間平作訳『改訂版 婦人論』上 岩波書店(文庫)東京 421頁。訳者序(1946. 7)、改版の準備1938年に一応完了とあり。 (昭和女子大学図書館1959. 9の15刷り所蔵 [女8276])
1955. 7. 5	草間平作訳『改訳 婦人論』下 岩波書店(文庫)東京 267頁。第9刷り改版、伏せ字復元。訳者あとがきあり。(昭和女子大学図書館1975. 7の29刷り [0-066-400]と1958. 3の11刷り [女8275] 2冊収録) 中国語訳 1955刊行(後述)
1955. 9. 10	森下修一訳『婦人論』上 角川書店(文庫)410頁。ベーベル原著の各版の序文なし。 (昭和女子大学図書館初版所蔵 [女41-213-1])
1955. 10. 5	森下修一訳『婦人論』下 角川書店(文庫)274頁。訳者解説(1953. 5)あり(解説で中国語訳があることに触れている)。 (昭和女子大学図書館初版所蔵 [宮内文庫 女41-213-2])
1958. 5. 31	伊東勉・土屋保男訳『婦人論』上 大月書店 255頁。訳者解説、ベーベル原著各版の序文あり、55版序あり。 (昭和女子大学図書館1982. 6の25刷り所蔵 [女41-143-1])
1958. 6. 30	伊東勉・土屋保男訳『婦人論』下 大月書店 519頁。事項索引・人名索引あり。 (昭和女子大学図書館1982. 6の19刷り所蔵 [女41-143-2])
1971. 1. 16	草間平作訳 改訳『婦人論』上 岩波書店(文庫)東京 408頁。第26刷り改訳 ベーベル写真あり、訳者序(1970. 8)あり。 (昭和女子大学図書館1976. 1の31刷り所蔵 [0-66-399])
1981. 5	草間平作訳 改訳『婦人論』下 岩波書店(文庫)東京 (未見)。

いずれにせよ、ベーベルの"Die Frau"の日本語訳を手がけた人々は、①堺利彦・幸徳秋水、②村上正雄、③牧山正彦(草間平作)、④山川菊栄、⑤加藤一夫、⑥森下修一、⑦伊東勉・土屋保男であったということがわかる。①は広告だけ、②は「過去の女性」のみの英語訳からの重訳、③ははじめての独語からの完訳、④は米語訳からの重訳であるが②よりも早い完訳出版、⑤は牧山訳を英訳と対照し、牧山訳の改訳・代訳の性格をもつ、⑥は戦後、戦前のものは絶版状態と判断し、大正末期・昭和初期の訳文の新しい用語での訂正を意図、⑦は従来訳の省略・脱漏・誤訳を訂正し、ベーベル原著の序文の完訳とい

う特徴がある。

別の見方をすれば、①米語からの山川訳(これは戦前のみで戦後改訳はない)、②独語からの訳を中心にした牧山-加藤-草間訳(これは、戦前から戦後へと改訳しながら引き継がれる)、③独語からの森下訳(戦後)、④独語からの伊東・土屋訳(戦後)と大きく4つの流れが"Die Frau"の日本の読者を獲得したといえる。中でも、ベーベルの第50版の現代語完訳(ベーベルが50版に付した3つのVorredeを訳しているという意味で)、かつ訳者解説・事項索引と人名索引の充実したものは、伊東・土屋訳ということになる。しかし、岩波文庫版草間訳は、上巻が1971年(1985年

4月36刷り迄出ている)に、下巻が1981年(32刷り)に最後の改訂を加えているとのことであるので、伊東・土屋訳を最新訳と断言することはできない。ちなみに、大月書店版は、1988年6月25日に上巻の26刷りを、1989年2月に下巻の20刷りを出して以来刷りを重ねていない。大月書店版の最後の刷りが、"Die Frau" 初版発行から数えて110年、そして、ベルリンの壁崩壊の1989年であったことは象徴的である。戦前から戦後にかけて、これら各訳、各刷りが何部であったか明確では

ないが、少なくとも日本で10万人以上の読者が居たであろうと推測される。

各翻訳本の訳語の対照は今後の課題とし、本稿では、主に章の題のレベルで、大まかな比較を行っておきたい。

(2) 最初の日本語訳山川訳と牧山訳について

まず、山川の4種の版における1923年に対する他の版(1925, 1928, 1929)の題・目次の用語変遷を追ってみる(表5)。

表5 山川菊栄訳各版における題・章名の変遷
(左欄は、1923年アルス版、右欄は、1925, 1928, 1929年版)

題：『婦人論-婦人の過去現在未来-』	1925『婦人の過去現在未来』
訳者はしがき	1928『婦人論』、1929『婦人論』
緒言	1925 訳者はしがきなし
第一篇 婦人の過去	1925序文、1928緒言、1929序文
第一章 原始時代に於ける婦人の地位	
第二章 母権制度と父権制度との闘争	
第三章 基督教	
第四章 中世紀の婦人	
第五章 宗教改革	
第六章 第十八世紀	
第二篇 婦人の現在	1929：現在の婦人
第七章 性的存在としての婦人	
第八章 現代の結婚	
第九章 家庭の分裂	1929：家族の
第一〇章 生活手段としての結婚	
第一一章 婚姻の機会	
第一二章 売淫-ブルジョア社会に必要な社会制度	
第一三章 産業界の婦人	
第一四章 教育のための婦人の闘争	
第一五章 法律上に於ける婦人の地位	1929：おける
第三篇 国家と社会	
第一六章 階級国家と近代無産階級	
第一七章 資本主義的産業に於ける集中の過程	1928：作用、1929：過程

第一八章 不景気と競争	1925：恐慌、1928：不景気
第一九章 農業の革命	
第四篇 社会の社会化	
第二〇章 社会革命	
第二一章 社会主義社会の根本的法則	
第二二章 社会主義と農業	
第二三章 □□の廃滅	1925：○○の○○、1928：××の廃絶、
第二四章 宗教の将来	1929：○○の○○
第二五章 社会主義的教育制度	
第二六章 社会主義の社会に於ける文学と芸術	
第二七章 個性の自由なる発達	1929：自由発達
第二八章 将来の婦人	
第二九章 国際関係	
第三〇章 人口問題と社会主義	
結論	

このように山川訳にベーベル原著の各版の序文がないのは、メタ・シュテルンの米語版にこれらがすべて省略されていたからである。山川の4種類を比較しても、検閲による伏せ字、削除箇所は微妙に異なっている。1923年版は、特に削除箇所がそのまま、スペース的にも空欄となっているが、それ以降の3種は、多少の伏せ字を復元し、削除による空欄も伏せ字で繋ぐという形式になっている。

1923年の山川完訳と、1922～1924年の牧山訳の異なるところは、まず、書名そのものであり、次に、後者ではベーベル原序「34版のために」と、「50版のために」が付いていることである。ベーベルは、1910年の第50版には、この他「第25版のために」も付けているが、牧山はそれを、末尾に付すと第1篇の冒頭に予告しながら、第5冊目の「おことわり」で「約束にも関わらず省略」と書いている。さらにこの原序は、1928年の加藤一夫訳で削除され、後の草間平作訳でも再び現れることはなかった。加藤訳以降書名も山川訳と統一され『婦人論』となった。ベーベ

ルの原序は、伊東・土屋訳が1958年にはじめて第50版にベーベルが付したと同じ上記三本の序を完訳した。

"Die Frau" が、時期的にもせりあって、なぜ多くの翻訳者の手で日本語訳されたのであろうか。また、山川の米語からの重訳が時期的に最初の完訳であったとしても、それとほぼ同時並行して出された、書名、原序がむしろベーベルの原書に近い独語からの完訳である。牧山訳は、なぜ山川訳と同じ名声を博さなかったのであろうか。牧山訳は出版社が京都で5分冊になっていたということは、山川訳よりも普及を困難にしたせいかもしれない。

牧山の1922～1924年の独語からの最初の日本語訳目次は、それを元とした中国語訳との対比の必要から次節に表示する（表7参照）。そこからもわかるように、牧山は、第7章、第9章、第10章の訳語を何度か変えている。第23章が伏せ字になっていることは山川の場合と同様である。

3、中国語への翻訳

(1) 中国語への翻訳

"Die Frau"の中国語による全訳は、まずもって沈端先 (Shen Duanxian = 夏衍 Xia Yan 1900～1995) の1927年の初版¹を嚆矢とする。彼はさらに1949年<新1版>に初版と同じ出版社から、1955年<第1版>に三聯書店より単行本として刊行しているが、後述するように、各版においていくつか細部の修正・変更が認められるものの、特に1949年<新1版>の内容はほとんど初版と変わりが無い。また1920年代、30年代を中心に、雑誌や新聞などでも"Die Frau"が、紹介、部分的な抜粋、あるいは原書を明記しないままの翻案 (前山 1993) などのかたちで、たびたびとりあげ

られている。

ただし、沈端先訳は日本語版からの重訳であることが、初版に寄せられた編集者の<付印題記>から確認できる。雑誌や新聞の抄訳も、原書が明記されていない場合であっても、時代背景や、その記事の筆者の大半が日本留学の経験の持ち主であることから、おそらく日本語からの重訳と考えるのが妥当であろう。したがって、1995年の葛斯 (Ge Si)・朱霞 (Zhu Xia)による"Die Frau"の訳書が、独語から初めて翻訳された単行本とってよい。それは沈端先訳の初版から実に68年後のことであった。以上の流れを表6に示す。

表6 ベーベル "Die Frau" の中国への紹介及び中国語訳
(翻訳年、翻訳者名、翻訳書名、出版社、出版地、その他)

1920	李漢俊訳<女子将来的地位>《新青年》第8卷第1号9月1日 (梅生編 1929再取) 朱枕薪訳<倍倍爾的婦女問題論> (倍倍爾婦女論的序言) 《婦女雜誌》12月第8卷12号 pp. 28-31 括弧内は訳者
1922	任白涛訳<機械的物質的結婚> "Die Frau" 第二編より抄訳
1927	任白涛訳<倍倍爾的女子教育論> "Die Frau" 抄訳、初出《婦女雜誌》第10卷第7、8号 (任白涛訳 1927 再取)
1927. 12	沈端先訳《婦人與社會》開明書店 上海 婦女問題研究会叢書758頁。1928. 11第2刷り (北京大学所蔵)、1929第3刷り、1931. 11第4刷り (上海図書館所蔵)、1935. 1第5刷りまで発行。扉にベーベルの肖像画あり。ベーベル原著の<三十四版序><五十版序><序言>あり、章錫琛<付印題記> (1927. 12. 24) あり。伏字なし、5編30章。
1929	高聖希訳<倍倍爾的婦女論>《泰東月刊》1月第2卷5期 pp. 1-6 (山川菊栄訳1923『婦人論』アルス出版社より重訳、抄訳)。(未見)。
1949. 7	沈端先訳《婦人與社會主義》<新1版> 3冊 開明書店 上海 (北京図書館所蔵) 758頁。ベーベル原著の<三十四版序><五十版序><序言>あり、章錫琛<付印題記> (1927. 12. 24) あり。
1955. 2	沈端先訳《婦人與社會主義》<第1版>生活・読書・新知三聯書店 506頁。北京第1刷り、1959. 9 第2刷り<北京第2次印刷>、1963. 2第3刷り<北京第3次印刷>まで発行。扉にベーベルの写真あり。ベーベル原著の<三十四版序><五十版序><序言>あり。
1995. 9	葛斯・朱霞訳《婦女与社会主義》中央編訳出版社 505頁。ベーベル原著の各版の序文なし、訳者あとがき (1995. 7) あり。

(2) 主な訳者および各訳書について

"Die Frau"の初版から1955年〈第1版〉までの訳者沈端先は、1900年浙江省に生まれた。1920年浙江省立甲種工業学校を卒業後、1921年公費留学で福岡の明治専門学校電気工学科に入学する。そこを1926年に卒業し、さらに九州帝国大学工学部第3部類に入った後、翌年帰国して共産党に入党する。1929年には芸術劇社を結成して魯迅らと交流をもち、中国左翼作家連盟結成に参画することになった。彼は左翼小説家、シナリオ作家として名を馳せるに至り、新中国成立(1949年)後は、文化部(日本における文部省にあたる)次官、文芸及び日中間の文化交流の重鎮として活躍した。しかしながら、沈端先もまた他の多くの知識人と同様、文化大革命中は迫害を免れることは不可能であった。それでも文化大革命の10年間を除けば、彼はいわゆる成功者の部類に属するのではなかろうか。沈端先訳の"Die Frau"初版から数えれば68年、1955年〈第1版〉からでも40年の歳月を経なければ、全面

的な改訳を行うことがはばかれていたところに、彼の文学的ならびに政治的な成功の重みが垣間見える。

さて、それぞれの版の異同をここで検討しておこう。初版は、沈端先が日本留学を終え、翻訳に携わった頃の最初の訳書である。彼は後年、この訳書を刊行した出版社の編集者への追悼文〈懐念章錫琛先生〉(夏衍 1987)の中で、1927年当時"Die Frau"を翻訳するきっかけになったのは、編集者の章錫琛(Zhang Xichen)の依頼によるものであったと回想している。章錫琛が初版に寄せた〈付印題記〉(1927. 12. 24)を読むと、当時"Die Frau"の日本語訳には、独語原書からの牧山訳『婦人と社会主義』と米語訳からの山川訳『婦人論』など3種類の訳書が存したが、そのうち沈端先は牧山訳を元とし、山川訳をも参照したと記している²。牧山訳とその後日本語訳の変遷、沈端先訳とその後の中国語訳の変遷を対比して表7に示した。

注1 本稿で扱う1927年から1995年までベーベルの"Die Frau"の中国語は、「版」と「刷」の用語が統一されていない。開明書店刊行の訳書では、初版が〈1927年初版〉と記載され、続いて〈1927年初版1928年再版〉、〈1927年初版1929年3版〉、〈1927年初版1931年4版〉、〈1927年初版1935年5版〉となっており、初版以外の〈…版〉は、日本語の「第一刷」と同意である。1949年に同一出版社から版を改める際には、〈1949新1版〉と変更されている。また三聯書店から改訳本として刊行されたとき、〈1955年第1版 1959年北京第2次印刷〉、〈1955年第1版1963年北京第3次印刷〉などのような記載となった。

1995年の中央編訳出版社の新訳では、三聯書店の記載と同様に、〈1995年第1版 1995年第1次印刷〉となっている。このように大変まぎらわしいので、混乱を避けるため、本稿では出版年と中国語の記載を併記した。なお〈 〉、〈 〉内は中国語表記のまま。

注2 1927年の初版1刷では「…訳者は独語がわからないため、やむをえなく日本語から…」という箇所が、1931年発行の4刷から「…訳者はすぐに独語の原書を手に入れることができないため…」と書き替えられている。

表7 日本語の牧山—加藤—草間／森下／伊東・土屋および中国語の沈端先、葛斯・朱霞の題と目次の比較

牧山	日 本 語			森下
	加藤	草間		
1922 (1) ~24 (5)	1928	1928 (上) 1929 (下)	1952 (上) 1955 (下)	1955
婦人と社会主義	婦人論		改訂版/改訳	婦人論
	ベーベル小伝 「婦人論」について	訳者序 —		
原序				
三十四版のために	消える	—	—	—
五十版のために	消える	—	—	—
緒言		序説		緒言
第一編 過去の婦人				
第一章 原始社会に於ける婦人の地位			おける	
第二章 母権と父権の争		との	戦い	闘い
第三章 基督教			キリスト	
第四章 中世の婦人				
第五章 宗教改革				
第六章 十八世紀				
第二編 現代の婦人				
第七章 「性」としての婦人	性的存在			
第八章 現代の婚姻				
第九章 家族の紊乱	混乱	潰滅		
第十章 給養院としての婚姻	生活手段	結婚		
第十一章 婚姻の機会		結婚		
第十二章 市民的世界の必要な社会制度としての 売淫	売春—ブルジョア社会 に必要な社会制度			ブルジョア社会に必要な 社会制度としての売淫
第十三章 婦人の職業上の地位				
第十四章 教養のための婦人の戦	教養を高めるための— 戦い			教養のための婦人の闘い
第十五章 婦人の法律上の地位				
第三編 国家と社会				
第十六章 階級国家と近代無産階級				プロレタリアート
第十七章 資本主義的産業に於ける集中の過程				おける
第十八章 不景気と競争				恐慌
第十九章 農業の革命				農業上
第四編 社会の社会化				
第二十章 社会革命				
第二十一章 社会主義社会の根本的法則				
第二十二章 社会主義と農業				
第二十三章 □□の廃滅	××××	国家の××	国家の廃止	国家の止揚
第二十四章 宗教の将来				
第二十五章 社会主義的教育制度				
第二十六章 社会主義の社会に於ける芸術と文学				社会主義社会における
第二十七章 個性の自由なる発達				発展
第二十八章 将来の婦人				
第二十九章 国際関係				
第三十章 人口問題と社会主義				
結論			結び	結論
おことわり	—		あとがき	解説

注1) 牧山訳 (1922~24) 沈端先訳 (1927) の中のアンダーラインは、後の訳で訳語に変化があった個所を示し、他の訳には前の訳に
2) *中国語訳1927版の〈序言〉はベーベルの第50版では第一編の直上にあるが、中国語においては切り離されている。

伊東・土屋	中国語			
	1958	1927	1949	1955
		沈端先		葛斯・朱霞
1958		1927	1949	1955
		婦人与社会	婦人與社会主義	婦女与社会主義
解説		序言*		
第五五版の序言				消える
第二五版の序文				
第三四版の序文		三十四版序		消える
第五〇版の序文		五十版序		消える
		付印題記		消える
序説				
		第一編 過去の婦人		婦女
		第一章 婦人在原始社会的地位		婦女
		第二章 母權與父權之爭		
		第三章 基督教		
		第四章 中世紀的婦人		婦女
		第五章 宗教改革		
		第六章 十八世紀		
		第二編 現代的婦人(上)		現代的婦女
性的生物		第七章 婦人與性慾		婦女
		第八章 現代的婚姻		
破壊		第九章 家族之紊乱		的
衣食の道		第十章 當作給養院の婚姻		生活手段
		第十一章 婚姻の機會		
青春-ブルジョア社会に必要の社会制度		第十二章 市民世界的社会制度—賣淫		作為資本主義世界所必需的社会制度的賣淫
				賣淫是資本主義世界必需的一種社会行業
		第三編 現代的婦人(下)		消える
		第十三章 産業界的婦人		婦女在職業上的地位
養を高めるための一戦い		第十四章 為教育而闘争的婦人		教養 婦女
		第十五章 婦人在法律上的地位		婦女
		第十四章 為教育而闘争的婦人		婦女爭取受教育權的闘争
		第十五章 婦人在法律上的地位		婦女的法律地位
		第四編 国家與社会		第三編
		第十六章 階級国家與近代無産階級		
資本制工業の集積過程		第十七章 資本主義産業的集中過程		工業
		第十八章 恐慌與競争		
農業の		第十九章 農業革命		
		第五編 社会的社会化		第四編
		第二十章 社会革命		
		第二十一章 社会的根本法則		社会主義社会
		第二十二章 社会主義與農業		
国家の止揚		第二十三章 国家的廢滅		消滅
		第二十四章 宗教的将来		
社会主義の芸術と著作人格の		第二十五章 社会主義的教育制度		
		第二十六章 新社会的文学及芸術		社会主義社会 與
		第二十七章 個性的自由發達		發展
		第二十八章 将来的婦人		婦女
		第二十九章 國際關係		
		第三十章 人口問題		人口問題與社会主義
むすび		結論		結束語
事項索引				訳者後記
人名索引				

て変化のないものは空欄で示す。

1949年<新1版>は、書名が《婦人与社会》から《婦人興社会主義》に改題されている³。それ以外は、訳語、構成等、1927年版と全く同じである。この版は新中国成立前夜にあたり、新しい題名が冠せられることになったのも、時代の流れとして、いかにも相応しいというべきであろう。

1955年<第1版>は、沈端先訳の中でもっとも訂正の多い版である。目次からしてまず<婦人>が<婦女>に変更され、<社会主義>が3箇所付け加えられた。訳語の変更の意味などについては王は改めて稿を起こしたい。この版の章構成、初版の5編から、翻訳の元にした牧山訳と同様4編になった。奥付には「今回新版を刊行するにあたり予め春秋社版の加藤一夫訳を参照し（ところにより独語原書も参照している）、個々の訂正も加え、省略した箇所も補足した」と記されている（括弧内は訳書）。また章錫琛の<付印題記>もこの版から削除される。しかし、なぜこの時期に日本の戦前の加藤一夫訳を参照したのであろうか。1952年に、日本ではすでに草間（＝牧山）新訳の上巻が岩波文庫に収録されており、同じ1955年には少し遅れて下巻も出されるという時期だったのである。

葛斯・朱霞訳は、すなわち1995年<第1版>は、1927年沈端先の日本語からの重訳以来、中国では初めての原書、独語からの翻訳である。目次の用語はより現代的になったほか、第7章、第10章の章題も訳者の工夫を窺わせる。この訳書は、1995年9月、北京における第4回世界女性会議にあわせて出版された。独語版（*Die Frau und der Sozialismus*, Dietz 1973）から直接翻訳されている。しかし、この新訳本は、1927年版から1955年版迄には存在したベーベル原著の第34版、第50版への序文（Vorrede）が消えているば

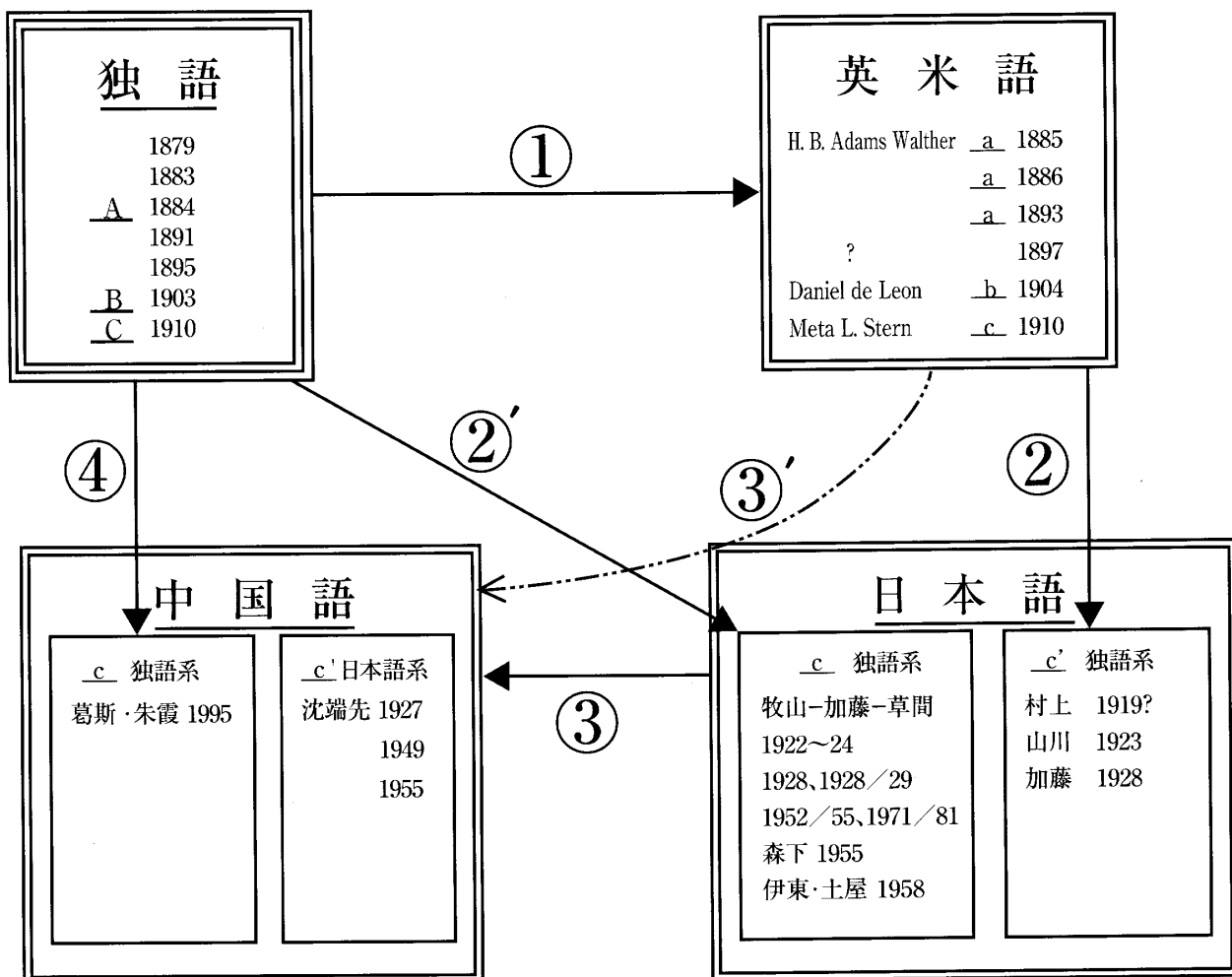
かりか、それに続く序言（Einleitung）さえ跡形もない。訳者あとがきが付されているが、そのことは何ら触れていない。この点は1958年に日本で出された伊東・土屋訳が、これら二つの序文は勿論、第25版序文を含めてベーベル第50版の姿を初めて完全に日本に伝えたのとは対照的である。また、1995年は、中断していたベーベル『選集』の継続発行が統一ドイツで始まった年でもある。翌1996年には『選集』第10巻の1分冊と2分冊が、それぞれ、“Die Frau”の1879年初版と1910年50版にあてられ、特に第2分冊には、ベーベルの第3版、第9版、第11版への序文の他、第50版への補遺（Anhang）まで付され、“Die Frau”研究に光を当てた。そのことを思い合わせると、日本では、すでにこの書の需要も少ない時期に、中国での新訳の出現には評価は惜しまないが、多少の無念さが否めない。

4、考察

以上、20世紀初頭の欧米女性解放思想の日本・中国への伝搬の過程をベーベルの“Die Frau”の場合を例に検討してきたが、この書の原語である独語からの直接の翻訳を通じて両国へダイレクトに入っていたのではない。三つの言語（独語、日本語、中国語）の間に、英米語が介在し、幾度もの、複数の翻訳者の手を経て、長い年月をかけて完訳にむかって進んでいったことがわかる。その関係を示せば図1のようである。

注3 この点、陸榮椿（Lu Rongchun 1984）が「1930年の第3版から《婦人興社会主義》に改題した」と書いてあるのは、思い違いか、あるいは誤記であろう。

図1 ベーベル"Die Frau"の日本と中国での翻訳に関する媒介言語関連図



注1) ———▶は翻訳関係、----->は参照関係、まる内の番号は翻訳順を示す。

2) 訳書と元とした書との関係はA → a、B → b、C → c → c'である。

この図は、ベーベル"Die Frau"の翻訳の場合、アメリカ合衆国においては、独語から早い時期に直接1本の線(図の①)、日本は、時期的にも遅れて(第50版出版後、そしてベーベルの没後10年を経過して)独語と米語から2本の線(図の②、②')を繋ぐことができることを示している。中国は、日本語訳が出た後、日本語からの重訳(図の③)、その際、米語からの重訳と米語訳を参照(図の③')したことから日・米日という複雑な媒介を経て、翻訳に至ったのである。後の独語からの翻訳(図の④)を入れて、独・米・日から3本の線が中国語を繋ぐことになる。もっとも、中国語は、米語からの重訳であることが明

白な山川訳から、さらに重ねて翻訳することはせず、独語からの直接訳である牧山訳を元としているから、米語は単なる参照という関係にある。結局中国にとって、英米語は独語、日本語と同じ比重の関係ではないのである。

しかし、山川訳、沈端先訳1955年までの中国語訳はそれぞれ、独語-米語-日本語、独語-日本語-中国語という流れでの重訳であるから、訳語の妥当性も、媒介言語によって、原語から遠ざかるのではないかという疑問を生じせしめる。そこで日中の最初と最新の翻訳(改訳は除く)、すなわち日本語は山川訳(米語からの重訳)と伊東・土屋訳(独語から)を、中国語は沈端

表8 主要三語の各国語翻訳の比較

	独語	英米語	日本語		中国語	
	1910	1910	山川 訳 (1923)	伊東・土屋 訳 (1958)	沈端先 訳 (1927)	葛斯・朱霞 訳 (1995)
第7章の題	Die Frau als Geschlechtswesen	Women as a sex being	性的存在と しての婦人	性的生物と しての婦人	婦人興性慾	作為性生物 的婦女
第9章の題	Zerruttung der Familie	Disruption of the family	家庭の分裂	家族の破壊	家族之紊乱	家庭的解体
第10章の題	Die Ehe als Versorgungsanstalt	Marrige as a means of support	生活手段と しての結婚	衣食の道と しての結婚	當作給養院 的婚姻	婚姻作為生 活保障手段

先訳（日本語からの重訳）、葛斯・朱霞訳（独語から）を取り上げ、目次において特に訳語に変化のあった語を3つを対比する（表8）。この表から日本語、中国語訳は重訳の場合、媒介した言語に訳語が規制されていることがわかる。

伏せ字については、日本語訳の戦前に出版されたものに限る現象であり、戦前に出版された各版にも出版の都度、伏せ字の個所が微妙に異なる。第20章の第2節を例をあげれば、山川1925年版では「収○者の収○」、同1928年版では「徴収物の徴収」、同1929年版では「収奪者の収奪」

となっている。また第23章の題は山川 1923 年版では、「□□の廢絶」、1925年版では「□□の□□」となっていた。この章の題は、戦前すべての訳者の訳において伏せ字のままである（表7参照）。戦後間もない1950年代に出版されたものでは第20章の第2節、第23章の題ともに表9に示したように、伏せ字が復元されている。参照のために表9中に中国語さらに独語と英語を入れた。第20章第2節の題は、原語ではDie Expropriation der Expropriateureであり、第23章のそれは Aufhebung des Staatesであった。

表9 日本語訳の章と節に見られた伏せ字箇所の復元と独、英米、中国語の比較

	日本語		中国語		独語	英米語
	1952/55	1958	1927	1995	1910	1910
第20章2	徴収物の徴収	収奪者の収奪	徴収物的徴収	剥奪剥奪者	Die Expropriation der Expropriateure	Expropriation of Expropriators
第23章の題	国家の廢止	国家の止揚	国家的廢滅	国家的消亡	Aufhebung des Staates	Abolition of the state

一方、牧山訳（1922～24）から翻訳した中国語の最初の翻訳（沈端先訳1927）には、伏せ字と削除の痕はいっさい見られない。前述した初版の章錫琛の〈付印題記〉（1927. 12. 24）によれば、日本語訳の伏せ字の部分は、訳者が英語訳を参照し、一部補足したが、また植字の際に編集者が更に補足したと記してあった。しかし、表3で示したどの英米語訳を参照したかは不明である。中国語の初版の章節の題と大まかな内容を牧山訳と比較すれば、以下の傾向がある。中国語訳では、章や節の題に関しては、日本語版

での伏字を補足しているが、内容文においては、日本語で段落的に削除された部分は、中国語では断りもなく、そのまま繋いでしまっている様子がみられるということである。このことから中国語訳では英米語を参照したとはいえ、語彙程度にとどまっているのではないかと推測される。

いずれにせよ、日本語訳も、中国語訳も、1920年代以降、複数の訳者が "Die Frau" の翻訳に挑戦し、それぞれに版や刷りを重ね、多くの読者を獲得して女性解放運動に影響を与えた。しか

し、日本では1970年代始めからの新フェミニズム運動と1975年以降の国連を中心とする運動に女性運動の主流が移って、1980年代末の東欧の崩壊後は、ついにベーベルの"Die Frau"への需要は激減し、版を重ねていない。中国で、1995年国連の4度目の世界女性会議の年に新しい翻訳が出されたこととは対照的である。中国の新訳の意味・役割及び各版の比較についての検討は、王の今後の研究課題となる。

冒頭で触れておいたように、1999年は、"Die Frau"の初版から数えて120年目に当たる。また、1998年はベーベル没後85年であった。1997年にベーベル『選集』全10巻14分冊を完結させて世界に発信した、ドイツのウルスラ・ヘルマンや、アンネリーゼ・ベスケらは、これらの節目を見逃さず、ベーベル研究を続けている。本小論は、彼女たちの求めに応じて、漢字文化圏での"Die Frau"の翻訳情報を提供するための草稿の意味をもつものである。

引用文献（著者名アルファベット順）

（ベーベルの"Die Frau"各版とその翻訳書各版は除外、なお中国著者名は日本語読みに従う。）

- 伊藤セツ 1992 「ベーベルの女性論再考 第1報」『昭和女子大学大学院生活機構研究紀要』Vol. 2.
 ————— 1996 「ベーベルの女性論再考 第2報」『昭和女子大学大学院生活機構研究紀要』Vol. 5.
 ————— 1997 「ベーベルの女性論再考 第3報」『昭和女子大学大学院生活機構研究紀要』Vol. 6.
 ————— 1998a 「アウグスト・ベーベル『女性と社会主義』にみるジェンダー統計表」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』No. 21
 ————— 1998b 「A. ベーベル『演説著作選集』

Ausgewählte Reden und Schriften 全10巻14分冊の完結によせて—女性解放論を中心としての紹介—」*Working Paper*, No. 12昭和女子大学女性文化研究所

- 1998c 「アウグスト・ベーベル『選集』の完結によせて」『労働総研クォーターリー』No. 31
 ————— 1998d 「アウグスト&ユリエ・ベーベル夫妻の文通」『女性文化研究所紀要』No. 22
 犬丸義一 1980 「ベーベル『婦人論』刊行百年によせて—日本への翻訳ノート」『歴史評論』1月No. 357
 王 宓 1993 「中国における『女性学』について(1)女性学成立前史—近現代中国における主な女性解放運動—」昭和女子大学紀要『学苑』No. 642
 ————— 1994 「中国における『女性学』について(2)女性学の成立と現状—女性学の成立の背景—」昭和女子大学紀要『学苑』No. 654
 ————— 1997a 「中国における『女性学』について(3)—北京第4回世界女性会議採択文書におけるキーワードの日中両訳語の検証—」昭和女子大学紀要『学苑』No. 690
 ————— 1997b 「李達的女性解放論における山川菊栄の影響」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』No. 21
 掛川典子 1992 「ゲリッツエン女性史コレクションについて」昭和女子大学女性文化研究所 *Working Paper*, No. 4
 夏 衍 1987 <懐念章錫琛先生> 李子雲編 1996 《夏衍七十文選》上海文芸出版社
 任白涛訳 1927 《近代恋愛名論》上海重東図書館 (1989 《近代恋愛名論》世界文化婚姻叢書 上海文芸出版社 影印本)

- 梅生 編 1929 《婦女問題討論集第一冊》新文化書社
- Bebel, August 1970 – 1983, *Ausgewählte Reden und Schriften*, Dietz Verlag, Berlin
1995 – 1997 *Ausgewählte Reden und Schriften*, K. G. Saur Verlag, Munchen
- Herrman, Ursula 1997 *August und Julie Bebel. Briefe einer Ehe*, Dietz, Bonn (Hersg.)
- 前山加奈子 1993 「『婦女園地』とその「園丁」たち——1930年代中国におけるフェミニズム論——」『駿河台大学叢論』第7号
- 陸栄椿 1984 《夏衍創作簡論》重慶出版社
- Watanabe, Hanako 1984 *Feminismus und Sozialismus in Japan*, in ; Leirer, Irmut et al. (Hersg.) *Sozialistische Fraueninternationale und Feminismus*, Verlag und Versandbuchhandlung Europäische Perspektiven GmbH. Berlin